

「イラストレイテッド外科手術 膜の解剖からみた術式のポイント」

兵庫県立尼崎病院院長 牧野 尚彦 著
兵庫県立尼崎病院・外科 篠原 尚

高知医科大学教授・第2外科

小 越 章 平

私ごとであるが、1990年に「イラスト外科セミナー」を医学書院から出版した。私自身がイラストを描き手術記録にどの画も利用できるような意図で書いた。その序文で“このような画なら自分でも描けそうだと思う若い人が出れば、この本の目的は達したと言える”と書いたが、まさに、それに答える期待以上の本が今回出版された。

本書では立体的でかつ簡潔明瞭、極めて要領を得た手術野のイラストが、まるで劇画のように次々と展開されているのには驚きの感をぬぐえない。また消化器外科は解剖、特に膜の解剖理解が大切で、手術基本手技は胃の手術に始まり胃の手術で終わるとも言われる。本書では胃をめぐる解剖、特に網嚢 Bursa omentalis についての詳細な解剖記載から始まり、更に複雑な直腸、鼠径管をめぐる解剖についての記載で終わっている。初心者のみならず、指導医の立場にある者にとっても、とにかくあいまいになりがちな部位の理解を

助けてくれ、極めて重宝である。具体的な手術手技は幽門側胃切除から始まり、胃全摘、胆摘、総胆管切開乳頭形成、結腸切除、直腸切除、肝切除、臍頭十二指腸切除、更に虫垂切除、ヘルニアに至るまで腹部消化器外科手術がほぼ網羅されている。

本書を手にして3~4時間で最終章まで一気に読み進んでしまい、不思議なことに私自身が執刀者として十数種類の手術を終えたような感を持つに至ってしまった。これは筆者の天賦のすばらしい画才のみならず、自ら手術中に経験した事項をオーペンの指示と共に詳細にメモし、手術後、手術書や解剖学書で克明に検索し、更に手術を行うといった、記載、推敲、記載の過程で生じた賜物であろう。正確であり、かつ綺麗なイラストは他に類を見ない。そのイラストもすべて“術者の視野”で描かれ、ほとんどのイラストには“術者の手”が描かれている。手術の名手は左手の使い方が上手であると言われるが、本書では術者の右手

はもちろん、特に左手の配置、手順がすばらしい。これが、まさしく読者を執刀者の位置に置き、読者の手が自然に動いているかのような臨場感、躍動感を与えるのであろう。

また各章ごとに序文があり、著者の手術に対する心掛けが記載されており楽しい。また各章最後に“ポイント MEMO”があり、オーペンからの“手術のコツ”など手術書には記載されていない実用的な注意点が記されているのも良い。手術中あるいは手術後、休憩室などで初心者が教授されている姿が目につく。

本書は図が大きいわりに余白が多い。著者が意図していることであろうが、この余白に読者が各々の経験事項を書き込むことができる。サブノートとして利用すれば、本書は既存の手術書とは異なり文字どおり、“生きている手術書”となりうるのではないだろうか。

● A4 336頁 図418 1994 定価
7,931円(税込) 円400

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)